

# 成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』

神田 文人

1

千葉県内の北部の下総地域には江戸時代に小金五牧、佐倉七牧といわれる放牧地があった。それらは以下のものである。

牧名	現在地名
小金五牧	上野 —— 柏市付近
	中野 —— 松戸・鎌ヶ谷市付近
	下野 —— 習志野市付近
	高田 —— 柏市・流山市付近
	印西 —— 白井町付近

佐倉七牧	取香 —— 成田市取香・三里塚、芝山町岩山付近
	内野 —— 富里町七栄・新木戸付近
	高野 —— 富里町高野・新井田付近
	柳沢 —— 八街町大関付近
	矢作 —— 多古町十 <sup>ト</sup> 余 <sup>ミ</sup> 三、大栄町十 <sup>ト</sup> 余 <sup>ミ</sup> 三、成田市十 <sup>ト</sup> 余 <sup>ミ</sup> 三付近
	油田 —— 小見川町油田、栗源町上ノ右付近
	小間子 —— 八街町四木付近

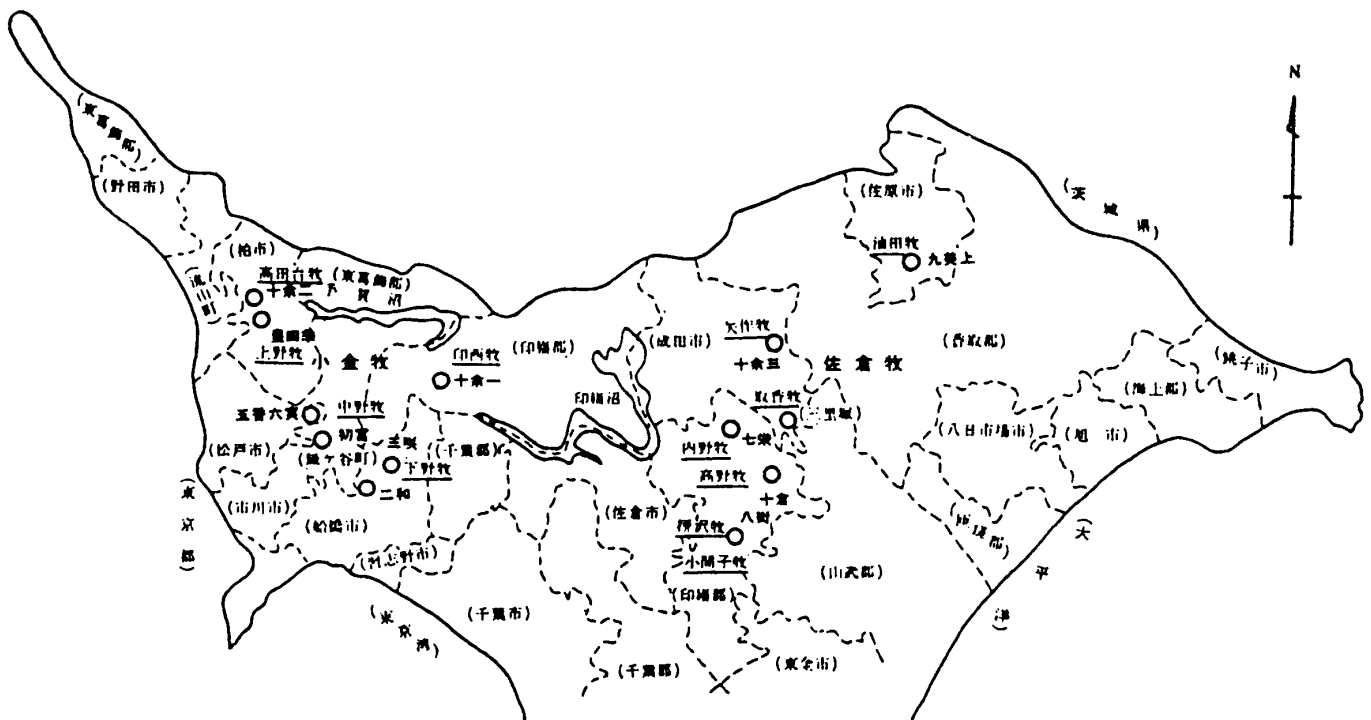


図1 小金・佐倉牧と開墾地々図  
『松戸市史 下巻(一)明治篇』より

以上の牧の内、ここで紹介しようとするのは佐倉七牧のうちの矢作牧についてである。それは、私も参加している本研究所の共同研究で現成田市内の明治期の開墾地およびその周辺地域の社会的、文化的問題についての検討を続けているからである。といってもここに列挙した三か所の全部を関連づけて取り上げることは困難である。主としては成田市に関係することを中心に述べたいと思う。

江戸時代、幕府の所管であった小金、佐倉の二つの牧は、明治維新後は政府の所管に移り、陸軍の演習場その他の施設が設けられ、首都防衛の重要な地域となった。この点について私は以前「千葉県の軍事施設および演習場」（『千葉県史研究』第 1 号 1993年）で紹介したことがある。

同時にこれらの地域は明治初年の士族授産事業の一環としての開墾地であったことが知られている。その概略についてはすでに村川庸子「千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究」（『環境情報研究』第 6 号）によって紹介されている。

明治維新後、政府は開墾局を設置し、三井八郎衛門や西村郡司、小野善助ら東京の資産家に開墾会社を設立させ、これに20万円の資金を貸し付け、開墾移民を募って開墾事業を開始した。開墾者にたいしては農具のほか鍋・行灯・盥などの日用品を支給し、長屋風の農舎への入舎の他、入植後3年間は開墾会社が衣食住を保証し、畑5反歩（約50 a）、宅地5畝（約0.5 a）を配分するなどの条件で入植者を募集した。ところが農作業はもちろん、開墾になれない入植者には多大の困難を強要した。しかも天災も相次ぎ、離村脱落するものも多かったという。

## 2

さてこれらの開墾地の内、矢作牧について見ていくことにする。矢作牧に十余三と称する3か所の開墾地がある。現在の多古町、大栄町、成田市の3か所である。これは初富（現鎌ヶ谷市）、二和三咲（現船橋市）、豊四季（現柏市）、五香・六実（現松戸市）……として始まった開墾地としては13番目の最後のものである。そのうち多古町は旧久賀村、大栄町は旧大須賀村、成田市は旧遠山村であった。

これら3か所のうち、明治10年代中ほどに参謀本部によって作成された「迅速測図」によると、旧成田村の東北東約五キロメートル余りの所に「十余三村」がある。他の二か所はこの地図には登場していない。1903,4年測図の参謀本部の地図には旧遠山村北部と旧久賀村の北西部に十余三があるが、旧大須賀村には登場していない。しかし現在の地図には現大栄町（旧大須賀村）にも十余三という部落は記入されている。地図上の判断では成田市、多古町、大栄町の順に十余三という開墾地が形成されたのかとも思われるが、文書資料によると必ずしもそうではない。『多古町史』の「旧久賀村」の部分に次の記述がある。

明治二年十月二日、移住の第一陣は中野牧（松戸鎌ヶ谷付近）へ入植、下総牧々開拓の鋤下しが行われた。一番初めという意味で「初富」と命名され、……

開墾事業は決してなまやさしいことではなかった。あたり一面、身のたけを上回る荆の荒野に、入植者はただ恐れをなしてなすすべもなかった。雨露を凌ぐだけの農舎に住まい、手足はいばらに切り裂かれ、いかに覚悟はし

## 成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』

て来たとはいえ、余りの苦痛に脱走するものもあった。……

……こうした中の明治三年秋、辛うじて幾ばくかの麦が収穫され、続いて夏作は「……岡穂ヲ始メ夏作第一、粟稗等至極生イ立宜シク一同気力ヲ得候処……」であったが、期せずして真夏の炎天は作物の生気を奪い、やがて明治四年七月九日、古今未曾有と嘆かれた大暴風雨に襲われ、一転して奈落へ突き落とされた入植者は発すべき言葉すらなかった。

この時の被害については『松戸市史』にも紹介されている。「小金三牧潰家取調書」には次のように書かれているという。壊滅的打撃を受けたことが明らかである。

五香 拾棟之内七棟皆潰レ、三棟無事、  
六実 農舎織場トモ皆潰レ、但少シ茂残無之候事

この結果、経営困難に陥った開墾会社は政府に補助を申請したが認められなかったため翌1872年5月解散した。ただ会社には馬とともに小間子牧

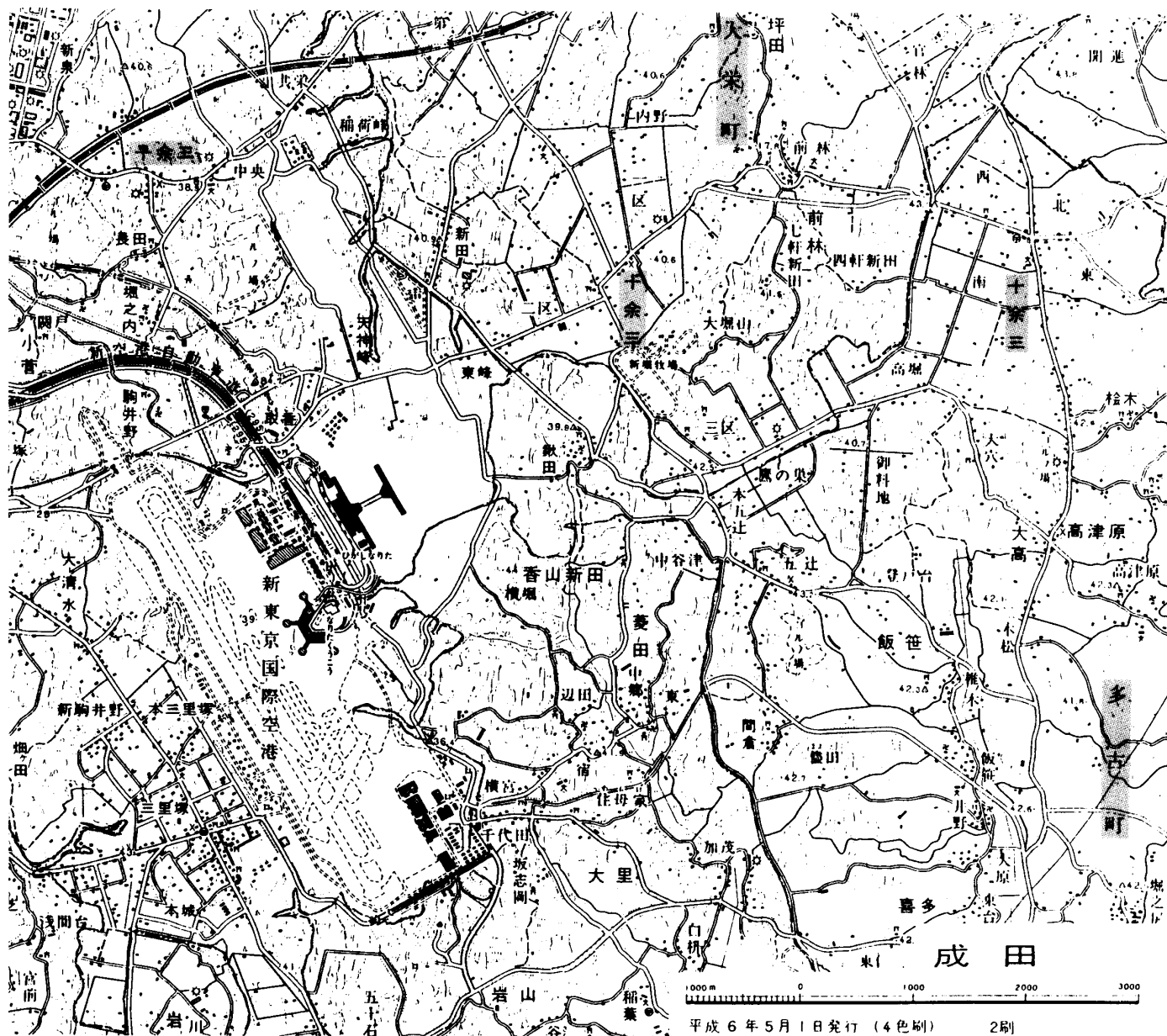


図2 成田近郊 矢作牧

が与えられ、貸付金20万円の返納も免除された。この時期は地租改正に着手するために壬申地券交付の方針が決定したときであった。旧会社役員は開墾地の地券を一括して自分たちに交付するよう当時の当局印旛県に申請した。一方開墾者は、昔から開墾地は開墾者の所有に属するという慣例に依拠して裁判で争うことになったが、その経緯は省略する。

ところで先の大暴風雨の被害を受けた入植者は他に開墾地を求めて脱出した。その新しい開墾が十余三であった。それについて『多古町史』はいう。

十余三壺番（赤池付近）は中沢彦吉（開墾会社頭取酒問屋・両替 利屋南新堀壺丁目四番地）、十余三弐番（大栄町付近）は半田屋久蔵（後小野善助持・肝煎古手呉服・木綿・橘町壺丁目七番地）、十余三参番（成田市付近）は小野善助（窮民授産開墾掛兼総頭取、通商会社・為替）と、以上の三人が中心となって開拓されることになったのである。

これで明らかなように、十余三村は、一度は五香六実に入植したが自然災害に遭遇したために離村した人達の二度目の入植開墾地だったのである。しかもそれは3か所への入植であった。「赤池」というのは旧久賀村（現多古町）であり、成田市の場合は「十余三参番」ということになる。

### 3

それでは十余三という開墾地について陸軍の『偵察録』がどのように記録しているかというのが次の課題である。この記録は先に述べた「迅速測図」の作成と一体のものであったので、明治以

降の地図の作成との関連を述べた上で『偵察録』を紹介したい。

江戸時代の伊能忠敬は別として、明治維新後は欧米諸国の指導を受けて地図作成に着手した。国土地理院『測量・地図百年史』によれば「政府の各機関は別々に欧米先進国の技術者を招いて、その指導を受けつつ事業を進めていた」とあり、最初の三角測量に基づく「地図測量は、明治5年、工部省測量司による東京府下の5百分の1の地図作成であった」。一方陸軍はフランス武官の指導を受けて1872年以降測量を始めたが、とくに西南戦争のとき、「陸軍が急きょ戦場地域の地図測量を行い、軍用に供した。その測図の方法が迅速測図法」であったが、「迅速測図とは正規の三角点の成果に準拠しないで行った各種の測図法の総称」であるという。

それでは「迅速測図」にはどのようなものがあったのかというと、佐藤<sup>さかえ</sup> 悠「『偵察録』について——明治前期民情調査報告『偵察録』解題——」（1968年 柏書房からのマイクロフィルム刊行についての解題）によると、陸軍の参謀本部が1878年12月に天皇直属の機関として独立するやその翌年から測量を開始したもので、それには作成時期や地形図から以下の4種類に分けられるという。

- 1) 迅速2万分1地形図の区域  
東京を中心とする関東平野一帯
- 2) 仮製2万分1地形図の区域  
京阪神を中心とする近畿中央部の地域
- 3) 正式2万分1地形図の区域  
東海道の小田原から西に向い、山陽道の姫路付近までの地域で、一部日本海の地域が含まれている
- 4) その他

## 成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』

明治13年から同27年までの途中で、臨時作業として行われた長崎県の対馬、五島全域

このときに記録する要件としては以下のものが挙げられていた。

天然物 土地の位置、景況、山地、水地、地質、  
大気  
統計 人民、住所、建築物料、農事、森林、駄  
獣、食用禽、工業、商法  
交通 陸路、水路、渡水法、電線

これを見ると如何に大掛かりな調査、偵察を目指したかが分かる。しかし「以上の内容がもれなく収録されたのは明治16年の前半に作成されたものの迄で、まず統計表がはずされ、次いで、記載項目が漸次減少し、さらに、1冊に収容する地域が拡大するにつれ、内容が一層簡略化された」という。私はこれらの地図を一部しか見てはいないが、見た限りでは等高線がなく、また当時の旧村（自然村）の境界線も入ってはいないものである。それでは次ぎにこの地図で明治初年の開墾地十余三はどのように記されているのであるか。適宜読点を付して引用する。

### 偵察録 明治十四年五月第一測期第十測図 第二班第一図根測手 陸軍砲兵少尉林八郎 千葉県下総国埴生郡及ヒ印旛郡一部

第一大測板ハ下総国西南部印旛郡東部ニ跨リ、測板中著名ナル聚落ヲ成田駅ト云ヒ、其東ノ小市ヲ寺台宿ト称シ、共ニ埴生郡中ノ宿駅ニシテ、成田駅ハ郡ノ西南隅ニシテ西ノ方佐倉ヲ距ル三里八町、東ノ方佐原ヲ離ル八町ナリ、此測板ノ占領スル土地ノ現状ハ平岡盤桓シ其西北部ハ林樹繁茂隠蔽ノ区タリ、而シテ東南

部ハ曠野多クシテ人烟稠密ナラス、寺台川ハ埴生郡南境畑ケ田村ヨリ発シ北流シテ右谷左溪ヲ併シ、芦田村ニ至リ長沼ニ注キ利根川ノ河盆ニ属セリ、此川ハ専ラ悪水排去ノ為ニ設クル溝渠ニシテ、其幅ニ米突ヨリ四米突ノ間ニ出入ス、地質ハ肥瘦混合スト雖トモ耕種ニ適良ナル者鮮ナシトセス、此地ノ気候平和ニシテ寒暑其他大気変換ノ如キハ東京ト異ナル事ナシ

埴生郡、印旛郡ハ共ニ千葉県ノ管下ニシテ其郡役所ヲ佐倉ニ設ケ警察署ヲ成田ニ置キ之ヲ管理シ、郵便局ヲ七栄、両国、成田、三里塚ニ設ク、宗教ハ各宗アリト雖トモ真言宗ヲ信依スル者多シ、生計法ハ農ヲ専ラニスト雖トモ成田駅ノ如キハ販売ヲ業トス、家屋建築法ハ木製ニシテ蓋フニ茅萱ヲ以テスルモノ多シ、成田駅ハ一繁盛地ニシテ此地ニ寺アリ新勝寺ト云フ県下中ノ名刹タリ、境内ニ小丘アリ不動堂ヲ安ンス、堂院皆銅葺樺造土木ノ壯麗ヲ極メ賽客ノ行香スル者絡繹トシテ常ニ絶ヘス、故ヲ以テ旅舎商肆櫛比セリ、若シ此地ニ軍隊ヲ棲宿セシムルトキハ歩兵一旅団ヲ収容シ得ヘシトス、寺台モ亦宿駅ナリト雖トモ甚タ狭小ニシテ二中隊以上ヲ棲宿セシムルコト能ハス、其他各村ノ如キモ殆ト之ト相等シ、農事ハ漸次進捗シ丘阜或ハ荒蕪地ヲ開墾シ畑地ト為ス者甚タ多ク、取香原、両国原ノ如キハ農務局ノ所轄ニシテ現今盛ニ開墾ニ就キ穀草ヲ種エ、又育種場ヲ設ケ牛馬綿羊ヲ畜ヒ、道路ヲ構造シ、官舎ヲ建築セリ、故ニ近來各地ヨリ移住スル者少ナカラズ、森林ハ西北部ニ多クは大抵民有ノ松林ニシテ時ニ之ヲ伐断シテ薪炭ト為ス、此地ノ物産ハ佐倉炭及ヒ蒟蒻ニ

シテ頗ル名声ヲ得

印旛郡中川村ヨリ成田ヲ経テ十余三村ニ通スル県道ハ佐倉ヨリ成田ヲ経テ佐原町ニ至ル者ニシテ、其幅四米突乃至五米突其造法ハ平坦道ニシテ漏水溝ノ設ケナキガ故ニ雨候ニハ泥濘甚シ、然レトモ中川村ヨリ成田ニ至ル間ハ造法善良ニシテ其幅モ濶大ナレハ野砲隊砲車縦隊ニテ行進スルヲ得、而シテ其路縁ニハ正列樹ヲ植設セリ、成田ヨリ松崎（安食道）及ヒ新妻（滑川道）、七栄（東金道）ニ、上岩橋ヨリ三里塚（多古道）ニ通スル四条ノ里道ハ其幅ノ広狭一ナラス、大約二米突ヨリ四米突ノ間ニアリ、故ニ歩兵隊ト雖トモ二列行進ニ非ザレハ通スル能ハス其造法ノ如キハ上ノ者ニ相等シ、一般ニ其土ハ皆赤墳ニシテ石ヲ交ヘザレバ晴朗ノ日ハ砂烟天ヲ衝キ雨候ニハ泥濘ト為ナリ、大ニ軍隊ノ行進ヲ支障スル事有ルベシ、戦備ノ時ニ於テ敵軍銚子港ニ上陸シ、佐倉城ニ来攻シ、東京ニ進入スルモノト仮想スルトキハ必ラス其一軍ハ多古道ヲ採リ酒々井ニ向ヒ、一軍ハ佐原道ヲ取り成田ニ向ヒ進入スヘシ、然ルトキハ多古道、佐原道ハ最モ重要ニシテ之ヲ防守シ、時ニ大出撃ヲ行ヒ彼ヲ退却セシメザルヘカラズ、乃チ之ガ守備ヲ為サンニハ大室、十余三、取香、両国ノ曠野ニ於テ土地ノ天陰ヲ応用セル堅牢ナル一ニノ堡壘ヲ構築シ、数個ノ分派堡ヲ以テ之ヲ連係シ以テ銚子街道上高岡ノ軍ト連絡ヲ有ツノ外他案ナキガ如シ、此曠野ニハ各所ニ森林散立シ予備隊ヲ潜匿シ、或ハ露營ヲ為スニ便ナリ、又縦横ニ拒馬ノ設ケアレバ間ヲ蔽壁ニ採用シ得ヘキ者多シトス

これを見ると成田周辺の村落の配置、自然景観、河川や道路の状況、郡役所・警察・郵便局の所在、寺の存在、軍隊宿泊の可能性等、専ら首都東京の防衛の観点から偵察したものであることが分かる。とくに道路の状況は軍隊の移動にとって重要であり、また宿泊施設としての可能性も不可欠の条件であった。さらに銚子方面からの敵軍の侵入に備えるにはどうすべきかということも検討していることが分かる。林八郎少尉の偵察はこれだけであるが、他にも何人かが同じような報告を提出している。例えば明治15（1882）年に第二班長工兵大尉早川省義、第二班の歩兵少尉三戸信義、歩兵少尉押上森蔵、工兵少尉泉省己の偵察等々がある。こうした偵察の結果、あるいはそれと並行して地図が作成されたのであった。

それらの偵察の中には人情風俗についての項目もある。それは調査項目の「統計」のなかの「人民」のなかで取り上げられていた。その点について印旛郡大和村・根木名村（現富里町）、下植生郡郡川栗村・畑ヶ田村（現成田市）を偵察した泉少尉の報告の中に次のような記述がある。

人口竈数漸次多キヲ致ス是レ土人健康ナルニ依ルカ

人情ハ稍々質朴ナリト雖三里塚区ハ諸所ノ射利者ノ集合且ツ商業ヲ專一トスルヲ以テ浮薄ナリ

風俗ハ弊依跣ヲ常トス

概シテ土人怯気アルヲ覺ユ、又稍々義気アルカ如シト雖単ニ一身ノ交際上ニ止リ必任義務ヲ解スルモノ少シ

「土人」や「浮薄」という、現在では差別用語となっているような言葉が登場しているが、こうした表現は他の地域を調べた偵察の記録でも随所

## 成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』

に現われている。当時はこうした用語は何の抵抗もなしに普通に使われていた。また報告自体は「秘」なので一般の人の目には触れることがなかったので一層抵抗がなかったのであろう。さらに「弊依跣」の記述に、当時の貧しかったであろう生活の様子が窺われる。ただこれらの記録には、冒頭の地名に「十余三村」はあっても、文中では触れているものがない。文中で述べているのは林少尉の偵察録だけだったのでそれを紹介し、泉少尉の記録で偵察録の他の特徴の一端を紹介したのである。

ここまで執筆してきたが、前半の開墾の実情の紹介と偵察録とは有機的な関係は無く、それを合わせてもまとまった報告にはなっているとは自負できない。しかし明治期前半の成田周辺地域の開墾地がどのような状態であったか、多少は理解のよすがになったのではないかと思っている。

## 参考文献

- 『多古町史 上巻』 多古町史編纂委員会 1985  
『松戸市史 下巻(一) 明治編』  
松戸市史編纂委員会 1964  
『成田市史 近現代編』  
成田市史編纂委員会 1986  
『富里村史 通史編』 富里村史編纂委員会 1981  
『測量・地図百年史』 建設省国土地理院  
測量・地図百年史編集委員会 1970  
佐藤 <sup>さかえ</sup> 侑 「『偵察録』について解題」  
柏書房 1986  
『千葉県の歴史 資料編 近現代7  
(社会・教育・文化1)』  
千葉県史資料研究財団 1998

## ABSTRACT

### Settlements in Narita City and its Outskirts : Army “reconnaissance records”

Fuhito KANDA

The purpose of this article is to explain two points.

- 1) How Yahagi, which was one of Sakura 7–Maki and a horse pasture in Edo Era, became Toyomi Settlement located in Tōyoma village (present Narita city), Kuga village (present Tako town) and Ōsuga village (present Taiei town) in the early Meiji Era.
- 2) How these were settlements in “reconnaissance records” of the Army’s General Staff Office.